生物多様性国家戦略の見直しに関する懇談会
第７回会合（発言概要）

平成 19 年３月 13 日　１６：００～１８：００
出席委員：石坂座長、岩槻委員、小野寺委員、中道委員、林委員、鷲谷委員

（次期戦略の構成）

・構成は現行戦略と同じで良いが、国家戦略が知られていないことが問題。このため、「生物多様性はなぜ維持すべきか」に関する市民向けのわかりやすい説明や温暖化を含む地球環境の中でのわが国の生物多様性の状況など、「理念・目標」を生物多様性の普及広報という視点で書き換えていくべき。

（生物多様性の現状・理念・基本的考え方）

・これまでの限定的な場所を守る自然保護から、経済と自然という異なる価値を並べてどうしていくかというところにきている。その意味で、今度の戦略は国土計画的側面を強く持つ。人間が変えられないものとしてのスーパーインフラたる地形・地質・大気候や生物多様性に人間活動をどう載せていくかという意味での自然との共生を計画的にどう解き明かすかということではないか。

・戦略をどう実現するかという点では各省間の協働体制をもっと踏み込んで構築すべき。

（超長期的に見た国土の自然環境のあり方）

・１００年計画という視点は重要。過去をみると社会状況の変化が自然の変化として現れるのに３０年くらいかかっており、例えば里山を今後３０年単位でどうソフトランディングさせるかが重要。

・里地里山は、奥山・里山・人里というゾーニングの中で位置付けられてきた。それはかつて日本人が伝統的に創り出してきたものであるが、今後は日本列島全体のゾーニングの中での里山を政策的にどうするかが問われる。

・公共投資による施設を将来更新するか否かの検討を行う際には生態系や環境の視点を入れることが重要。

・大型のゲンゴロウ類が生息するなど良好な里地里山は既に限定されてしまっており、将来種の供給源になりうるので優先的に保全すべき。また、自然との共生に向けた地域の意志があるところは重要。

（生物多様性の指標・評価）

・戦略の目標は国土全体の生物多様性の量と質を上げていくことにつきる。

・数量的目標を掲げることは難しいが、評価の入口として指標を設けて数字を定期的に追うことは意味がある。

（地球規模の生物多様性保全への対応）

・温暖化は非常に大きい話だが、生物多様性の面からの対応策がないと書いても迫力がない。書く際には温暖化をどう位置付けるかという判断を併せて書くべき。温暖化は３つの危機を超えたものというより、第１の危機の究極。２℃以上の温暖化は避けられず、生態系は必ず変わり生物多様性の面からは受容せざるを得ない。

・モニタリングによりカワラノギクやアサザは急速な減少に気付き対応ができた。温暖化で生態系が非線形的にドラスティックに変化する時がくるかもしれないが、早く気付けば緩和策がとれるかもしれないので、敏感になることが必要。

（学習・教育と普及広報、地方・民間の参画）

・日本では受験のため一律の教育が求められ、地域特性に応じて生物多様性を学校教育に入れることは容易ではない。一方、生涯教育という意味から博物館が、学校教育、地域、企業と関わっていけば生物多様性の普及教育効果も大きい。

・農家の子供が農作物の名前を知らないなど、次世代に生物多様性を論ずる子供たちが生物の知識に欠けていることは大きな問題であり、大胆な対策が必要。

・「３つの危機」はわかりやすい。より広めるための広報が重要。

・戦略の担い手として企業やＮＧＯが挙げられるが、１人１人の生き様にも関わるので social capital(社会通念)としてどう根付かせるかが重要。
・原生林の破壊や生物の絶滅はわかりやすいが、生物多様性は概念自体が難しく簡単には広まらない。人間と自然との関係を整理して示すことが戦略の枠組みとして必要であり、世の中が受け入れるまでには時間がかかるがやらなければいけない。

（沿岸・海洋域の保全）

・ウナギは淡水では捕食者として生態系上重要で、海洋生態系というより水系を移動するものとしてエコロジカルネットワークの健全性の指標になる。

（里地里山の保全）

・バイオマスエネルギーはエタノール化のための工学的研究にかたよっており、植生管理と絡めたシステムの研究は少ない。水辺や里地里山のオギ、ヨシ、ススキなど生活域に近い草をエネルギー資源とすることで草原管理ができれば、絶滅危惧種の保全にも役立つ。
・バイオマスエネルギーは、エネルギーを取り出す際のメタン発酵で生じる消化液の処理の問題や肥料や運搬にもエネルギーが投入されていることなどに注意が必要。
・里地里山全部を維持するかどうかの議論がまず必要。そのうえで環境直接支払いは難しい世界であることを認識すべきで、ＯＥＣＤの仕組みなどを勉強することも必要。
・里地里山は、産業面からのアプローチとは別に過疎等によって人手が入らなくなったところをただ放置するのではなく、何らかの手を加えて多様性を確保する方向に導くことも必要。

（自然環境データの整備）

・サクラやタンポポの開花日も１００年とれば立派なデータ。精緻でなくとも意識的・組織的に集めることが重要。
・参加型のモニタリングは、広域をカバーでき、多くの人が共通認識を持って行動に繋がるという点で、行政・研究者等によるデータを補完する以上の意味がある。
・鹿児島・出水の中学校のツルのモニタリングは、結果として５０年分のデータが蓄積されているが、教育活動でもあり、広報でもある。こうした活動を応援して、有機的に結びつけることが重要。